

ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流

筑波大学附属駒場中・高等学校

横尾 智治・八宮 孝夫・牧下 英世

慶應義塾大学

鈴江 智彦

筑波大学附属視覚特別支援学校

岩崎 彰治

筑波大学

浅井 武

ブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流

筑波大学附属駒場中・高等学校

横尾 智治・八宮 孝夫・牧下 英世

慶應義塾大学

鈴江 智彦

筑波大学附属視覚特別支援学校

岩崎 彰治

筑波大学

浅井 武

要約

本研究はブラインドサッカーによる筑波大学附属視覚特別支援学校と筑波大学、筑波大学附属駒場高等学校の3校の交流がどのような成果を得られるか検討した。2009年8月29日、品川区内のフットサル場で実施した。16項目のアンケートを作成し交流後に実施した。アンケートの結果を視覚障害者と健常者の2群に分け質問項目における平均値の差を検討した。交流後のアンケートの結果、視覚障害者と健常者ともブラインドサッカーは楽しい、また機会があればブラインドサッカーをやりたいと感じている。また両者ともブラインド・一般のプレーヤーがそれぞれが仲良くなれた、障害者スポーツに興味を持ったと感じており交流を行うためにブラインドサッカーは適していると考えられる。その結果から視覚障害者と健常者の理解が深めることができたと考えられる。

キーワード：ブラインドサッカー 交流 五感 コミュニケーション

1 はじめに

共生社会の実現のためには、障害のある人と障害のない人が互いに理解し、支えあっていくことが不可欠である。学校教育現場においては、子供同士のふれあいを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流や、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習を通して相互理解を図ることがきわめて重要になる。小・中学校等や特別支援学校の学習指導要領においては、障害のある子どもとない子どもが活動を共にする機会を積極的に設けるように示されている。また、障害者基本法においては、一部改正により、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない旨が規定された。

視覚障害者に人気があるブラインドサッカーは健常者にとっても楽しめる競技である。そこでブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流を考えた。

2009年3月28日に筑波大学社会貢献プロジェクト

・筑駒アカデミアの公開講座として筑波大学附属駒場中高等学校でブラインドサッカーが行われた。公開講座に向けて担当教員の横尾がブラインドサッカーのいくつかの企画に参加した。2008年10月11日には筑波大学技術大学でブラインドサッカー日本代表合宿に参加した。2008年10月18日には品川スポーツヒルズ銀座 de フットサル大崎スタジアムでパラサッカーフェスタに参加しブラインドサッカーのワークショップ、エキシビジョンマッチを体験した。2009年3月15日には筑波大学附属視覚特別支援学校グラウンドで筑波大学蹴球部と、附属視覚特別支援学校寄宿舎のブラインドサッカーチーム「レッドロケッツ」とのサッカー交流が実施され参加した。筑駒アカデミアの公開講座はそれらの企画に参加した経験やつながりによって公開講座は実施された。指導者として日本視覚障害者サッカー協会から、松崎英吾氏、石井宏幸氏、名代智美氏、筑波大学附属駒場中高等学校の卒業生鈴江智彦氏、筑波大学視覚特別支援学校から岩崎彰治先生に来ていただいた。参加者は世田谷区立芦花中学校

サッカー部員 9 名と引率顧問 2 名と筑波大学附属駒場中学校サッカー部員 20 名と顧問 1 名であった。プログラムとしてアイマスクを着けて目が見えない状態での移動、音源入りのボールのドリブル、シュート、目が見えない状態で声を頼りにしたグループ集合ゲームを行った。ブラインドサッカー選手である石井氏の動きをみて、生徒からは「目がみえているかのようなプレーで驚いた。」「目に障害があっても、サッカーは目が見える人と同様にできた。」「目が見えるかのようなプレーで五感がすごいんだなと思った。」というような感想がでてきた。他にブラインドサッカーを体験してみても感想では「声や音を聞いてそれを行動に移すのが難しかった。」「サッカーよりもコミュニケーションをとるのが大変で難しいと思った。どのような声を発するのかとても頭を使う。」「目が見えないと不便。障害がある人の気持ちが変わった。」等がでてきた。

これらを通してブラインドサッカーでは、身体感覚について気づくことや、コミュニケーションの難しさを感じることを多いことがわかった。また視覚障害者に対する理解が深められることがわかった。

本研究は、ブラインドサッカーによる筑波大学附属視覚特別支援学校と筑波大学、筑波大学附属駒場高等学校の 3 校の交流がどのような成果を得られるか検討した。

2 方法

2.1 日時、場所、参加者

2009 年 8 月 29 日、品川区内のジェクサーフットサルクラブというフットサル場で実施した。参加者は筑波大学附属駒場高等学校サッカー部 20 名、筑波大学蹴球部 10 名、筑波大学附属視覚特別支援学校ブラインドサッカーチーム「レッドロケッツ」8 名と各団体の関係者、指導者数名であった。

2.2 企画内容

「B1」のブラインドサッカーを体験した。B1 部門とは、両眼とも視力なしのサッカーで、音源入りのボールを追いかけ、パスをつなぎ、ゴール裏にいる「コーラー」と呼ばれる味方の声を頼りにシュートをうつサッカーである。

12 人程のグループを 3 つつくり、手をつないで円をつくった。自己紹介をして、名前を呼び合いながらパス交換を行った。その後ペナルティキック地点からのシュート、ドリブルシュート、ブラインドチームと健常者チームとの試合を行った。その際、健常者チームは見えている状態でプレーした。次にブラインドチー

ムに健常者チームが 1、2 名ずつ順番に交替しながら参加し、アイマスクを装着してプレーした。次に筑波大学附属駒場高校と筑波大学蹴球部のフットサルゲームを行った。

最後は筑波大学蹴球部と筑波大学附属駒場高校とレッドロケッツとの「B2・B3」ルールによるフットサルゲームを行った。B2・B3 部門のサッカーは弱視と呼ばれる人達のサッカーで、低視力や狭い視野の人達が、残存する視力を活かしフットサルに近いルールで競技する。交流後は参加者にアンケート調査を実施した。

2.3 アンケート調査の実施

筑駒アカデミアで実施したアンケートの結果を参考に 16 の質問項目を作成した。質問項目の 16 項目は次の通りである。「1 ブラインドサッカーは楽しい。」「2 また機会があればブラインドサッカーをやりたい。」「3 コミュニケーション能力が高まる。」「4 普段より声を出してコミュニケーションをとった。」「5 ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった。」「6 ブラインドサッカーは闘争心がわく。」「7 視覚（光・影）をよく使った。」「8 聴覚をよく使った。」「9 臭覚をよく使った。」「10 触角をよく使った。」「11 今までにない感覚を感じた。」「12 一般のサッカーに経験を活かそう。」「13 ブラインドサッカーは体力的に疲れる。」「14 ブラインドサッカーは精神的に疲れる。」「15 ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた。」「16 障害者スポーツに興味を持った。」

回答の選択肢は「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 5 段階に分けた。

アンケートの結果を健常者と障害者の 2 群に分け質問項目における平均値の差を検討した。分析には P A S W Statistics 18 を用いて対応のない t 検定を行った。

3 結果

3.1 質問項目値

回答の選択肢の「あてはまる」を 5、「ややあてはまる」を 4、「どちらでもない」を 3、「あまりあてはまらない」を 2、「あてはまらない」を 1 として数値化した。

表 1 に視覚障害者と健常者のアンケートの対応のない t 検定の結果を示した。

質問項目 3, 7, 9, 11, 13, 14 において 2 群間に有意な差がみられた。(p < 0.05)

表2に視覚障害者と健常者のアンケートの平均値を示した。質問項目にたいして「あてはまる」という度合いが強いことを意味する項目値4より高い項目は、健常者は、質問項目2、3、8、11、14であった。同じく視覚障害者において項目値4より高い項目は、質問項目1、2、3、5、8、15、16であった。

図1から図16までアンケート項目の回答の度数分布をグラフで示した。

4 考察

4.1 質問項目値について

2群間の比較の結果、健常者は聴覚と触角については視覚障害者よりもよく使ったと感じているが、視覚と臭覚については使っていないと感じている。

視覚障害者と健常者を比べ、視覚障害者はブラインドサッカーにより体力的に疲れを感じるが精神的な疲れは感じていない。また視覚障害者はブラインドサッカーにより闘争心が沸いている。健常者は目の見えない状態に慣れておらず、動くことができないため、体力的には疲れないが、精神的に疲れ、闘争心は沸かず、経験したことのない感覚を感じている。

視覚障害者と健常者の間でブラインドサッカーに対する感じ方は異なるが、両者ともブラインドサッカーは楽しい、また機会があればブラインドサッカーをやりたいと感じている。

また両者ともブラインド・一般のプレーヤーがそれぞれが仲良くなれた、障害者スポーツに興味を持った、コミュニケーション能力が高まると感じており交流を行うためにブラインドサッカーは適していると考えられる。

5 まとめ

本研究では筑波大学附属視覚特別支援学校と筑波大学、筑波大学附属駒場高等学校の3校の交流を通してどのような成果を得られるか検討した。結果から視覚障害者と健常者の理解が深めることができたと考えられる。

アンケートには交流の感想の記入欄を設けたがそれぞれの団体からは異なる印象を受けた。筑波大学附属視覚特別支援学校の生徒は視覚障害者という立場から、健常者と障害者の交流という観点で感想が書かれていることが多かった。両者の壁をなくしたいという願いが感じられた。

筑波大学蹴球部の学生は大学生で他の団体の生徒よりも年齢が上であり、交流の中ではリーダーシップを

発揮している場面が多くみられた。またサッカーの技能も優れており、そのためか感想からは五感の使い方、ボールタッチの感覚、目が見えないため頭の中でイメージを高めること等に面白さを感じているようであった。

これはブラインドサッカーの競技の面白さの一部であり健常者でも楽しめる魅力である。

筑波大学附属駒場高校の生徒の感想からはブラインドサッカーを初めて行って見て、目が見えない状態でコミュニケーションをとる難しさを感じていたようであった。交流では大学生に劣らないプレーを披露し、視覚障害者にも積極的にコミュニケーションを図り、コミュニケーションをとるのが難しいと感じながらも交流を楽しんでいる様子であった。

アンケートの感想からはブラインドサッカーの初心者段階では、コミュニケーションに困難を感じ、目が見えない状態でのブラインドサッカーの技能も低くブラインドサッカーは難しいと感じるようである。

ブラインドサッカーや目が見える状態での通常のサッカーの技能が高ければ、身体感覚やイメージすることの面白さを感じることができるようである。

ブラインドサッカーに慣れてブラインドサッカーのプレーヤーと同等に競技ができるようになれば、視覚障害者と健常者がともに楽しむことができ、お互いの理解を深められるようになりそうである。

そのような段階が考えられ、視覚障害者と健常者の深い理解のためには、ブラインドサッカーが普及し誰もが楽しめるようになることは重要であると考えられる。今後もブラインドサッカーによる視覚障害者と健常者の交流を検討していきたい。

【参考文献】

1. アーサー・サイダーマン (1991) トッププレーヤーの目 大修館書店
2. 石垣尚男 (2009) 眼力の鍛え方 新潮社
3. 岡田仁志 (2009) 闇の中の翼たち 幻冬舎
4. 小塩真司 (2004) SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 東京書籍
5. 筑波大学附属視覚特別支援学校視覚障害教育ブックレット編集委員会 (2009) 視覚障害教育ブックレット2 学期号V o l.11 ジアース教育新社
6. 日本視覚障害者サッカー協会 (2006) 視覚障害者サッカー競技規則 トライス
7. 真下一策 (1997) スポーツビジョン スポーツのための視覚学 ナップ

表 1. 視覚障害者と健常者のアンケートの対応のない t 検定の結果

質問項目	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定				
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値 の差	差の標 準誤差
1. ブラインドサッカーは楽しい。	.845	.364	-1.468	36	.151	-.567	.386
2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい。	2.706	.109	-1.898	36	.066	-.750	.395
3. コミュニケーション能力が高まる。	1.187	.283	.517	36	.608	.158	.306
4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった。	1.145	.292	-.152	36	.880	-.075	.495
5. ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった。	.421	.521	-1.200	36	.238	-.483	.403
6. ブラインドサッカーは闘争心がわく。	.667	.419	-2.191	36	.035 *	-.800	.365
7. 視覚（光・影）をよく使った。	5.312	.027	-4.805	34.771	.000 *	-1.158	.241
8. 聴覚をよく使った。	.816	.372	1.414	36	.166	.433	.307
9. 嗅覚をよく使った。	3.972	.054	-2.572	36	.014 *	-.792	.308
10. 触覚をよく使った。	.073	.789	.413	36	.682	.183	.444
11. 今までにない感覚を感じた。	.157	.694	2.123	36	.041 *	.942	.444
12. 一般のサッカーに経験を活かそう。	2.436	.127	-.140	36	.889	-.058	.415
13. ブラインドサッカーは体力的に疲れる。	.004	.950	-3.126	36	.003 *	-1.258	.403
14. ブラインドサッカーは精神的に疲れる。	1.334	.256	4.435	36	.000 *	1.450	.327
15. ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた。	.080	.779	-.967	36	.340	-.325	.336
16. 障害者スポーツに興味を持った。	.983	.328	-.527	36	.602	-.200	.380

仮定=等分散を仮定する。(項目7のみ等分散を仮定しない。)

*: $p < 0.05$

表 2. 視覚障害者と健常者のアンケートの平均値

質問項目	健常者 (N=30)	視覚障害 者(N=8)
1. ブラインドサッカーは楽しい。	3.93	4.50
2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい。	4.00	4.75
3. コミュニケーション能力が高まる。	4.53	4.38
4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった。	3.80	3.88
5. ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった。	3.77	4.25
6. ブラインドサッカーは闘争心がわく。	2.70	3.50 *
7. 視覚（光・影）をよく使った。	1.97	3.13 *
8. 聴覚をよく使った。	4.43	4.00
9. 嗅覚をよく使った。	1.33	2.13 *
10. 触覚をよく使った。	3.43	3.25
11. 今までにない感覚を感じた。	4.07	3.13 *
12. 一般のサッカーに経験を活かそう。	3.57	3.63
13. ブラインドサッカーは体力的に疲れる。	2.37	3.63 *
14. ブラインドサッカーは精神的に疲れる。	4.20	2.75 *
15. ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた。	3.80	4.13
16. 障害者スポーツに興味を持った。	3.80	4.00

*: $p < 0.05$

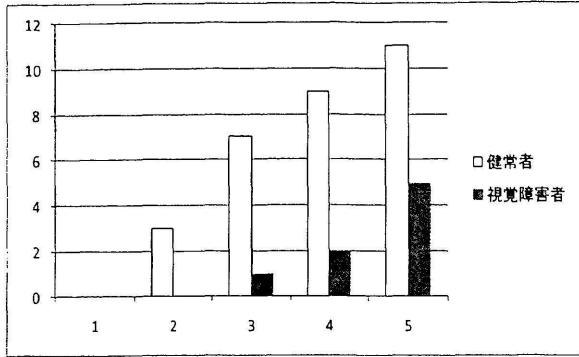


図1.ブラインドサッカーは楽しい。

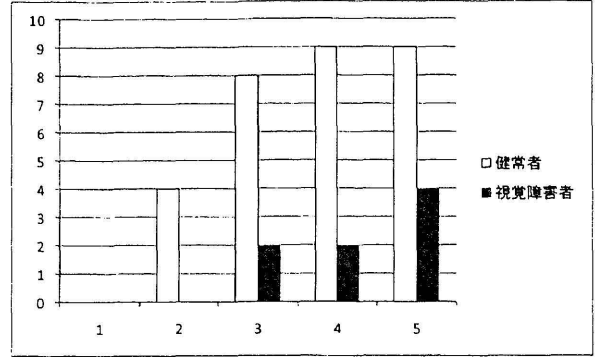


図5.ブラインドサッカーのプレイヤーの感覚がわかった。

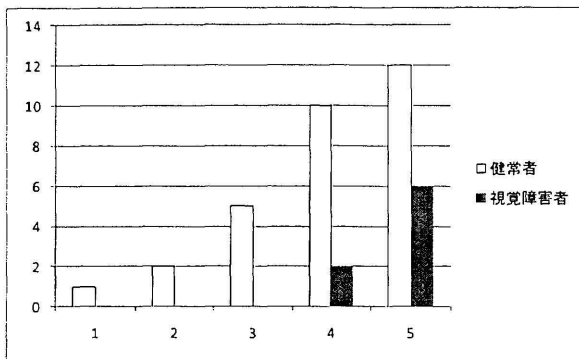


図2.また機会があればブラインドサッカーをやりたい。

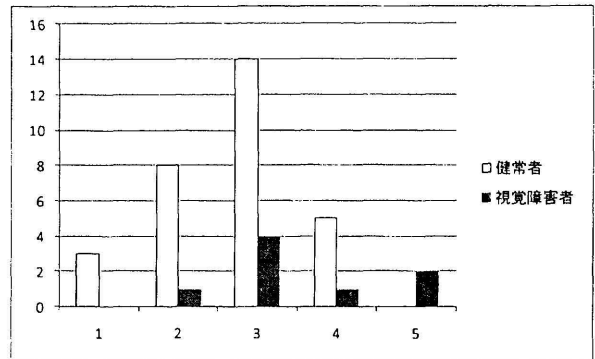


図6.ブラインドサッカーは闘争心がわく。

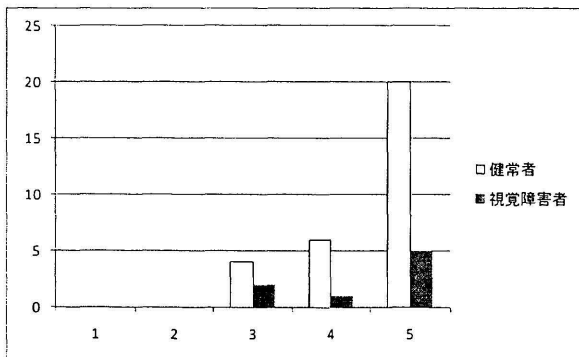


図3.コミュニケーション能力が高まる。

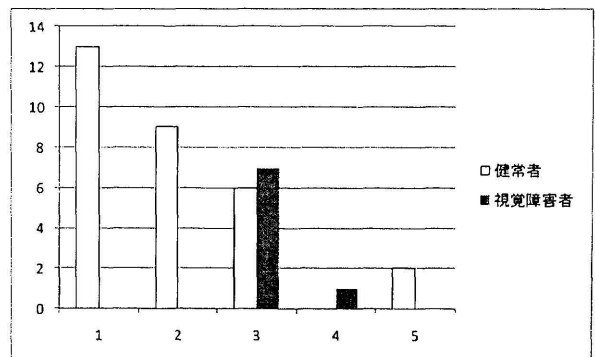


図7.視覚（光・影）をよく使った。

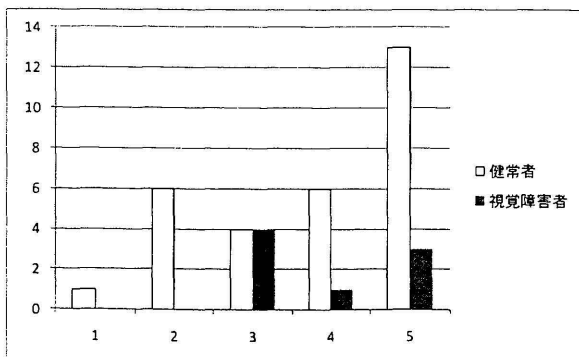


図4.普段より声を出してコミュニケーションをとった。

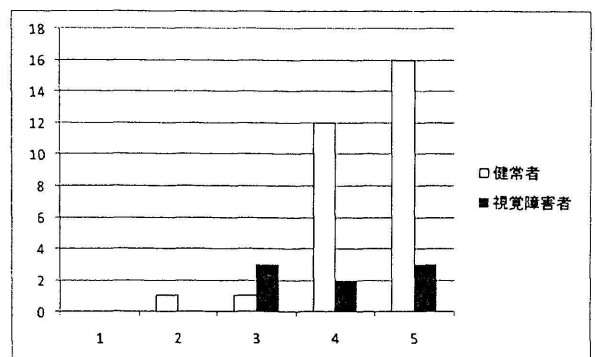


図8.聴覚をよく使った。

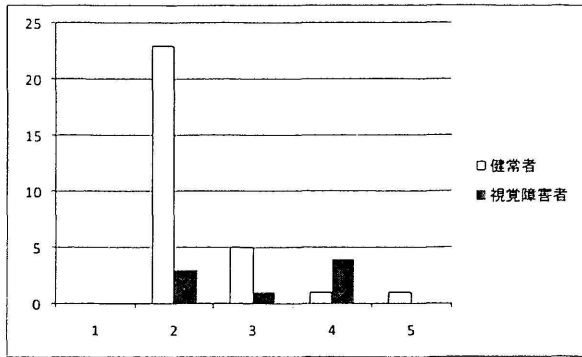


図 9.嗅覚をよく使った。

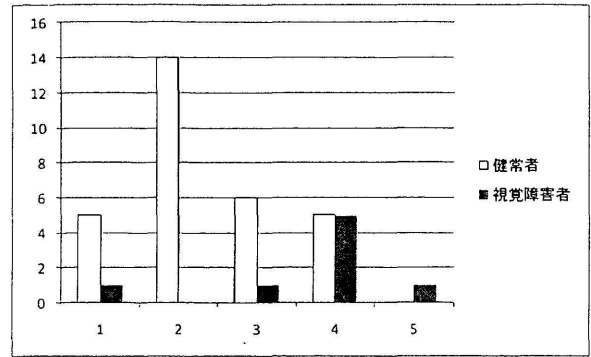


図 13.ブラインドサッカーは体力的に疲れる。

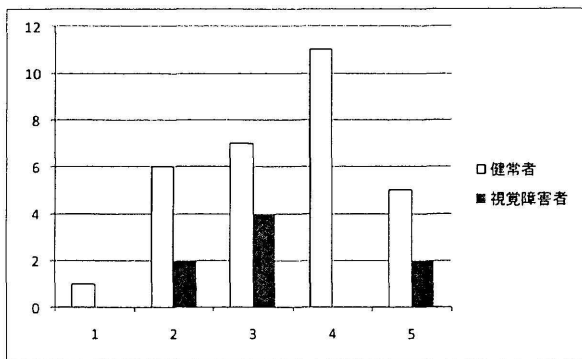


図 10.触覚をよく使った。

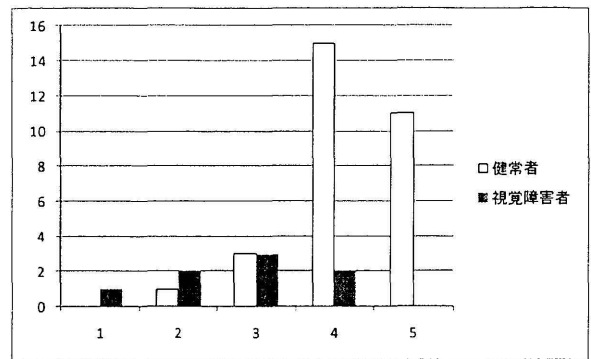


図 14.ブラインドサッカーは精神的に疲れる。

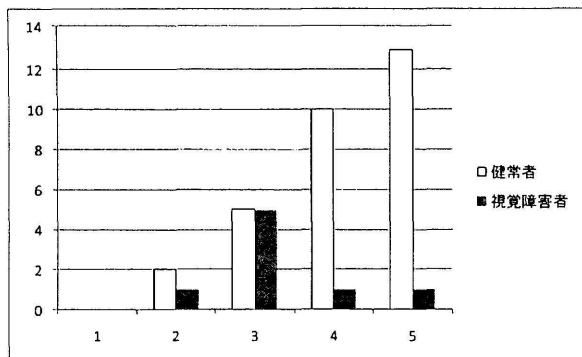


図 11.今までにない感覚を感じた。

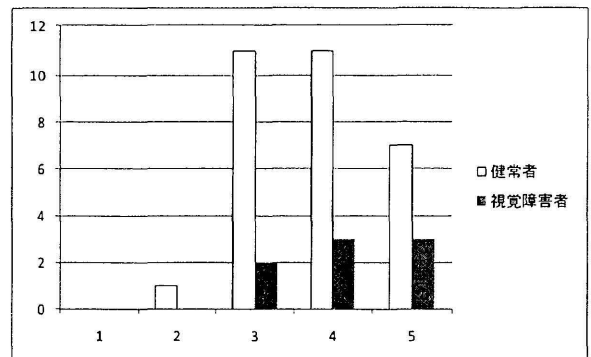


図 15.ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた。

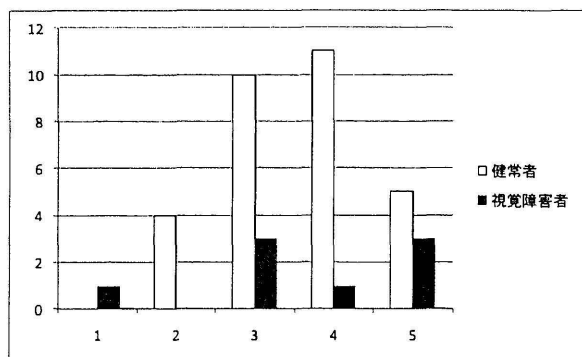


図 12.一般のサッカーに経験を活かさせよう。

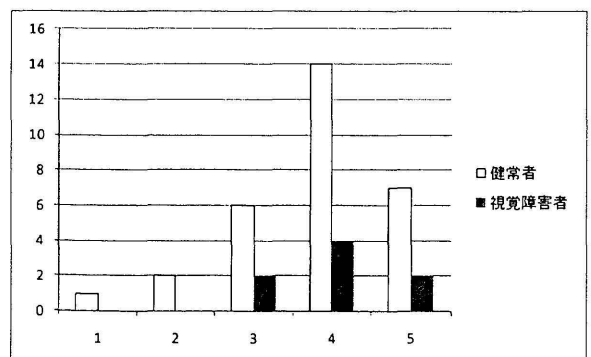


図 16.障害者スポーツに興味を持った。